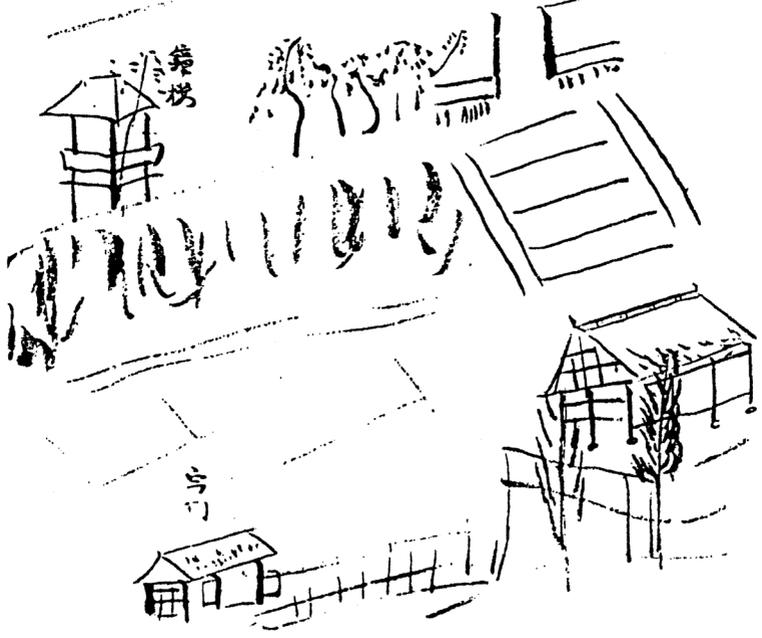


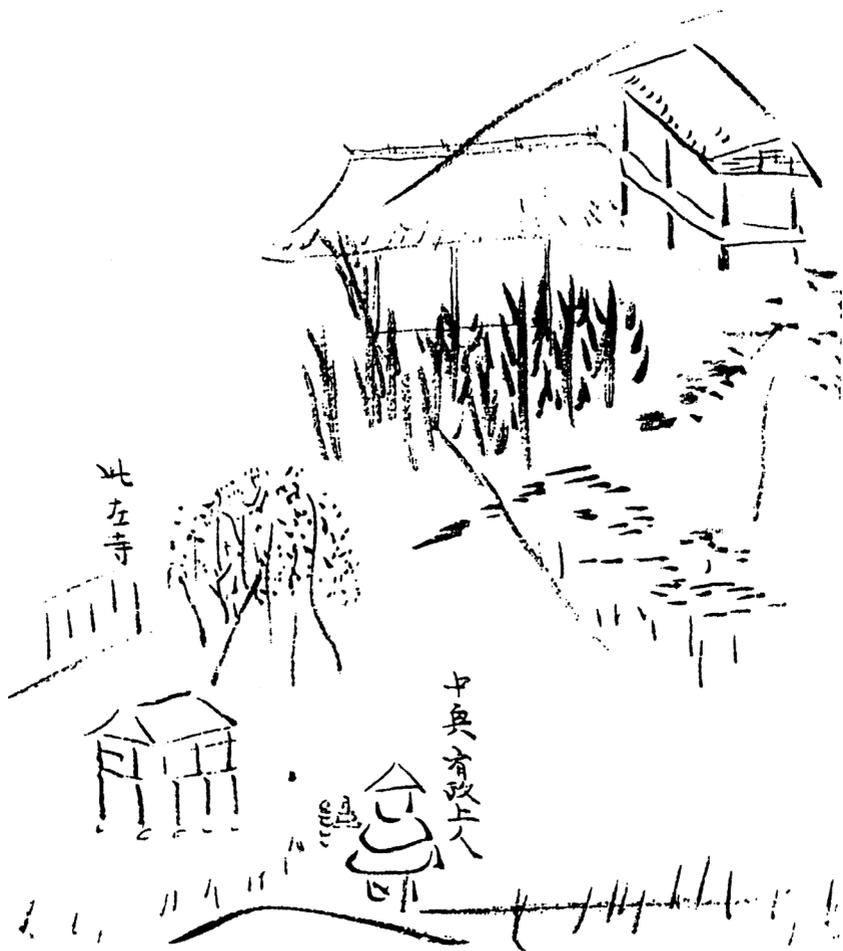
若菜院

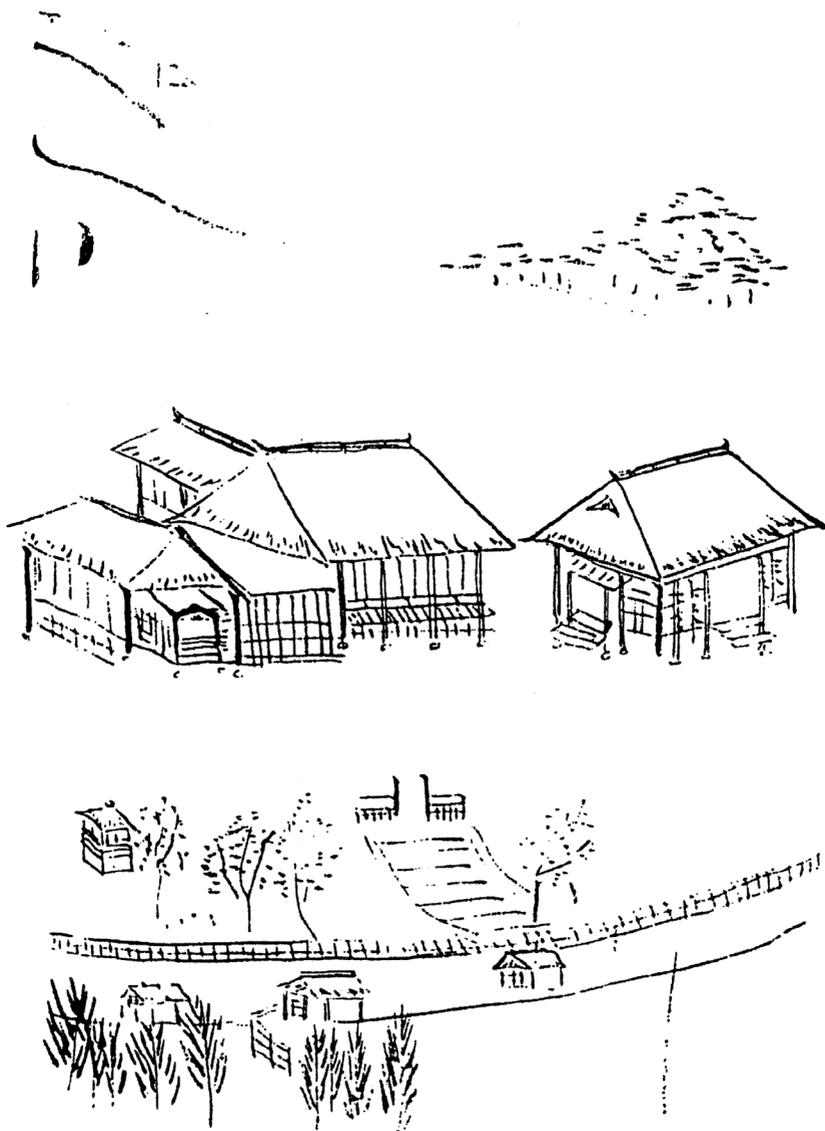


若菜

若菜









郡元上之坊阿弥陀コウノ板ノ背ニ、

大日本国日向州島津下ニ三字不分明

阿弥陀如来奉造立奉加ニ三字不分明

信心大願主

僧實

文明十^(八)年甲辰六月十五日敬白

理性坊

南之坊「コノ字不分明岡ノ字」

越前房

沙弥道

五郎太郎

孫左衛門

三郎

辰口

作者快杖(花押)

二郎兵衛

四郎衛門

三郎衛門

太郎次郎



阿弥陀坐像高二尺三四寸計、堂ノ板敷ノ板

古物ナリ、初造立ノ時ノ物トミユ、

寛保元彩色セシコト、右コノ板ノ内ニ記ス、

和光寺来由

一昔年稲荷大明神草創之御當家鼻祖島津判官忠久公、建

文七^(久カ)丙辰^(丙)祀八月廿三日、任薩隅日三州之守護代下着于

薩州出水郡山門院、後移于日州諸縣郡島津御庄、時は

建八^(久カ)丁巳年、新造御館而号祝吉御所矣、同九月七日午

日、稻荷神社柱立、同九月十九日午日迂宮祭祀ト是始

也、

一當社古より謂島津御庄世々、然最初御居住故欵、以島

津之御名字繇旃當所自古云島津 御名字而嶋戸又名郡

元云々、依之同年方于十一月建立寺院、為本地之道場

則安置十一面觀音之尊像長一尺七寸 立像薄彩色、寺号和光寺、弘法

大師地稻荷山建立社頭而為東寺之鎮守、專其例者也、
特為朝暮勤行使權大僧都舜全住之、任當宮之座主職為
當寺開基乎、命婦山正覺院和光寺、

慶安元年七月吉日

同稻荷等之由緒大概前ニ書ける内に、

一寺号名和光寺と弘法大師於稻荷山(マ)立社頭而為東寺之
鎮守、其日於手于書額以寄進大額詞曰、和光垂跡、雲
遙聳稻荷山木梢、同塵應現、影鎮覆王舍城近辺矣、依
此語号和光寺、一御本地 一十一面 一千手 一如
意輪 一普賢 一弥勒 一不動 一毘沙門 一命婦殿
本地文珠

覺

當地郡元稻荷大明神由緒者、御元祖忠久公御事、中
略ス、庄内南之郷之内安久堀之内ニ御所地にて被成御座
候、八文字民部大輔殿御事者、島津江御居住にて島津
民部大輔殿と申候由、八文字殿ニハ其後土佐國江御移、
其跡島津ニ忠久公御移被成候ニ付、島津判官忠久と奉
申候、是者建久八丁巳之年之由候、御所を者祝吉之御

所と申候、今ニ御門之跡と申傳小石之石塚式ツ、両所
江有之候、忠久公摂州住吉にて御誕生之時、御産神稻
荷を島津に御祝被成、同年九月七日午之日稻荷社柱立、
同十九日午之日御迂宮にて御祭有之候、夫故今ニ至り
九月十九日御祭礼候、寶殿之棟十文字之御紋有之候、
同年座主寺御建立、和光寺之号等之
事前ニ故略ス、「こ、に島津島戸ノ
弁有、」郡元上之坊阿弥地佛体之内に、文明十六年甲
辰、日向國島津院圓福寺造立と有之、同所安養寺阿弥
陀佛体にも、應永十五年戊子、日向國島津安養寺造立
と有之候、中略、天文其以前寺火災有之候、古來之縁記
又者文書等焼失ニ付、元龜三年七月八日、山城之國藤
之森稻荷宮之縁記、右座主寺(ママ)にて、和光寺之
住職明遍被写置候縁記并忠相修造之棟札等有之候、本
地之事略ス、命婦之社本地ハ文珠并にて稻を荷ひ御老翁
都東寺江参り、辰巳之方へ目出度青杉山有、彼山に祝
ひ給へと有之候由、故を以て當社にも杉之森を被仕立
置候由にて、于今大杉式本社殿之脇ニ有之候、中略ス、
庄内亂後龍伯公等
御參詣一件に年中御祭、十二月廿八日(注連)下、正月元
日御祭、同初午日御祭、同十三日本地之内毘沙門之修

正、三月朔日(マ) 下、同三日御祭、五月三日(注連) 下、

同五日御祭、八月十三日(注連) 下、同十五日御祭、九月

十七日(注連) 下、同十九日御祭、此日祭礼有之、十一月

中之午日御祭、同月廿八日荒神御祭にて候、神領高武

百三拾石、忠能代慶長十七年七月、大宮司藤田越前守

殿細山田大藏左衛門へ申付高六拾三石、持永権兵衛殿

中原兵部左衛門へ申付高八拾七石、和光寺八拾石支配

有之候、御分國中四部一上り又勘落にて寺社領(ママ) 相減

又者無高二相成ニ候得とも、右稲荷宮ハ別而御由緒有

之神社ゆへ、于今神領五拾三石余なり、和光寺貳拾石

余、細山田廿石、中原拾三石余にて御祭相調候、其内

正月元日・同初午日・十一月中之午日三度之御祭、當

家より代々御祭相調候、中略ス、忠久公御建立之神社故、

當家代々別而崇敬、年中数度之直參にて候、以上、

元文元年(ママ)丁巳二月御申分之筈にて右之通案紙相調、

享保十六年亥桂月、(ママ) 久 夫人百首之和哥を詠し、侍

臣資陽・資賢・資方・隆許・良測・実昭各百首を詠せ

させ壹冊とし、跋資陽記して奉納有、箱二入、右跋文之

内、兼喜宮・天満宮両社へ百首奉納有之由見へたり、

又洛陽梅月堂堯真人郢斧を乞はれし事度々ありしとミ

へたり、うた略ス、名所杜之題に、

秋のくるけしきの杜もうつろふや

色紅ぬに染るもみちは

(ママ) 久 夫人

秋の葉の散はてぬれば露の身も

今は歎きの杜と社こそなれ(ママ)

隆許

移り行世こそはかなし夏も過

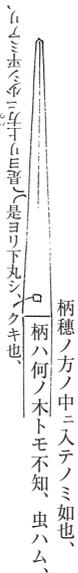
秋のけしきの杜の紅葉は

良測

郡元熊野三所権現 神体木像八体

慶長十五年忠時公再興棟札有、

同所鎌田周右衛門所持、高麗より持帰之鏹と云傳ふ、



柄穂ノ方ノ中ニ入テノミ如也、

柄ハ何ノ木トモ不知、虫ハム、

ハミホケニ在リト書シ、是ヨリ下九ツクキ也

穂惣長一尺一寸位

柄長サ三尺八寸位

一前に見へし安養寺阿弥陀者、今ハ川東村大草六兵衛跡隣之屋敷に直し候由、鎌田周右衛門咄なり、安養寺之跡ハ、早水境郡元之内堂山と云所也、安養寺門と云百姓の門あり、

一同所寺園阿弥陀寛文之棟札有、

都之城 正安之頃者求摩相良氏押領す之、其後北郷

氏領被成、都之城之内 南郷 中郷 北郷

三十二ヶ村惣名を庄内といふ、今末吉之内南

之郷 梅北 五十町ハ南郷なり、都之城本城

をも古城ハ五十町なり、

上長飯・下長飯・鷺巢・両柱(寺カ)・木前・後久・

宮丸・田部・安久ハ中郷なり、新地者下長飯

なり、

一奴具池 安永村

文和四年十二月十二日、島津七郎左衛門時資忠(尉カ)、為勲賞將軍尊氏公より賜北郷、安永川東を北郷といふ、依号北郷、永和

元年、嫡子義大(マ)に築城、其後代々住之、

〔イニ應和三年〕應安二年之春、伊東・相良・菱刈・牛屎・渋谷以下之(永和カ)

大敵圍之、本原を為陣營、氏久公為後詰卒八百計之

兵、三月一日、蓑原にて大合戦有、北郷弥次郎(基カ) 忠・

同七郎忠宣兄弟戦死、同三日にも又合戦有、味方本田

信濃守重親・肥後兄弟・石井某・北原彦七郎・宍目藤

藏戦死なり、敵方相良氏頼・伊東六郎左衛門尉・池尻

五郎・薩州一族之張本渋谷右馬、其外数名打取なり、

氏久公為援軍発志布志、同所(マ) 峯ニ陣被成、夫より平

長谷へ御陣替なり、

一文明八年、敏久安永より又當城ニ移ると云々、

一文祿四年乙未八月廿三日、(マ) 時久入道一雲去當地移祁

答院宮之城、當地ハ伊集院右衛門大夫忠棟(マ) 幸侃領

之、慶長四年春、幸侃誅伐之後、其子源次郎忠真楯籠

當城、翌年之春二月十四日降参す、慶長五年三月、讚

岐守忠能當地を安堵す、

一梶山城 應永元年甲戌二月十七日、元久公与(今川カ) 播

磨守貞兼有合戦、高城之主和田土佐守・梶山城主高木

長門守加勢す、北郷又次郎忠通戦死、又三月七日合戦、

北郷藤次郎久秀・和田土佐守・伊東又七郎戦死なり、

一慶長四年忠真逆意之節、家臣野邊彦市籠當城、同五年

二月廿九日下城、

一明應四年比、伊東家より當地を押領す、天文三年正月

六日高城落去候節、伊東兵當城もまた捨て退散す、

一野々美谷城 求广相良氏押領之、應永元年七月、元

久公密謀を以發岩川より討取守兵取返之、樺山音久を

城主ニ居へ玉ふ、従是世々樺山家在城して、至大永元

年百三十年住其地、其後今川貞兼庄内ニ在陣ならずし

て山東に退去けると云々、

一慶長四年、忠真家臣籠城、九月十日、北郷家手勢都之

城近邊宮丸村を放火、依て都之城より小松尾に出合追

合有、當城より野頭に出す、太守之軍對之攻合、

加賀守三久下知して北郷家人數横入、敵敗軍す、城門

まで追入る、此時小杵丹後守鎗を合す、

一慶長五年二月廿九日下城、

一明應四年ころ伊東家より押領、天文三年正月、高城落

去故當城主、

一安永城 北郷之内前山川内、城内金石ヶ城と云有、

一寛正六年六月廿九日、北郷持久去高城當地古江村今ハ中霧

島村之内ニあり薩广迫に移居す、其子讚岐守敏久 (ママ) 辻といふ

所を築、安永城と号すと云々、

應仁二年なり、

一天正七年八月一日、北郷二郎相久父一雲之命に背き、

當地金石之城にて自害、

一慶長 (ママ) 安永口にて攻合有之、同十二月八日、敵

伏兵を以味方百餘人戦死となり、

一北郷家世々傳領之由なり、明應四年ころより伊東氏押

領ス、 (ママ) 元年正月六日より忠相手裡に入、

一山田城 初荒神山と云慶長四年六月廿三日被攻落之、城主長崎

休兵衛尉・中村与左衛門尉なり、兩人ともに戦死、其

後 忠恒公御入城有之、九月廿九日なり、

一龍臥城と云、城内上総ヶ城 阿波城 新城 取添城

(五カ)西椿連曲輪四ツ有、上総・阿波者本丸之内地形二ツに

われ候所なり、北に大手・搦手、南ニ野頸有、東北に

川流れ、野頸之方隄有、

一北郷氏世々傳領地なり、天文年間北原氏より押領し、

白坂下総守居城之、

一志和池城 慶長四年七月十三日、城兵出て東霧島北郷

村働、八月十五日にもまた働出、北郷勢打出、丸谷ニ

對し(補カ) 牟礼之渡にて攻合、敵を城に追入也、十月十五

日、太守之軍勢城近邊ニ陣を被寄候、十一月八日、

柳川原にて攻合有之、城主伊集院掃部助なり、或春(成脱カ)

忠齋、合戦之時守之、同十二月四日間垣おくれ、同五

年正月四日夜間垣やふれ、人数少々此城に籠る、二月

五日下午、

一森田 慶長四年十月二日、太守(ママ) 公此地に御本陣

を居へ玉ふ、

一梅北城 元龜・明應之頃、新納家七代近江守忠武陷當

城外ニ百引・領知するなり、西生寺棟札、明應元年大且

那新納忠武

一天文七年戊三月三日落去、北郷領主と成、又天文七年

三俣之城を梅北ニ被替豊州格(ママ)と有、

一忠真逆意之時、日置善左衛門守之、同覺左衛門・渋谷

仲左衛門、

一茶園ヶ尾 北郷長千代丸陣場なり、

一高木 天文七年十月十六日、此所にて攻合有之、

一本本松 中霧島 風呂谷 枳ヶ谷 蛭嶽 柳川原

楠牟礼

此諸所合戦之場

一宗廟梅北村ニあり、例祭九月九日、有鏑流馬、

一神柱両社妙見 社官感應寺能登

祭神内宮三座 天照皇太神 左天手力雄神

右萬幡姫神

外宮豊受皇大神 東方國常立尊

西方天兒屋根命

大國命

右神柱神社ハ、後一条院御宇万壽三年丙(寅カ) 正月二十日、

平朝臣大監季基勸請、同年九月九日、神社造立なり、

高百四石余領、島津筑後守持高之内より寄附、

一松林山 成就院 天長寺大乘院末寺

「イニ慶長元年」 文祿四年十二月、於宮之城東谷建當寺、開山覺翁上人、

高百石余、

一長城山 竜峯寺 禪宗福昌寺末 開山起宗興和尚

一慶長元年丙申二月、於宮之城虎井村建當寺、其節開山

陽傳和尚、北郷家代々之石塔あり、高三拾八石四斗五

升、

一霧島山 金剛院 明観寺天台宗南泉院末寺

荒嶽権現不動堂別當

一(ママ) 阿弥陀堂額

大曼荼羅院 永仁三年乙未七月十日 正四位下左衛門

佐藤定成

一四徳山 大昌寺 此寺ハ北郷藤次郎久秀之位牌所にて、

門前ニ久秀功(ママ)之節脇掛石あり、開山不隣即和尚、寺

内兄弟之石塔五輪墓あり、

應永元年甲戌三月七日

(捐カ) 損館 日山妙且禪定門覺靈久秀位牌

應永元年甲戌二月十七日

右同 聖安道賢禪定門覺靈

前尾州太守哲翁忠英居士覺靈

右、大昌寺ニ安置有之なり、

金田村

一乙戸大明神 肝付家建立、永和年間也、

郡元村

一稻荷大明神 建久八年(ママ) 九月七日、忠元公御建立、

志和池村

一荒人大明神 白坂下総守靈を崇ふ、

天文十一年八月廿日、於高原北郷忠相と伊東・北原合

戦、北原臣志和池城主白坂下総守と云者於小山河原討

之、祭其靈候て荒神大明神とす、

一正一位兼善大明神 祭神靈体璽箱、崇北郷常陸介相久

靈、相久者北郷左衛門尉時久入道一雲之嫡男なり、天

正九年辛丑八月晦日、依讒違爰意自ら於安永金石城自

殺、年二十九才、法名等玄了山常德寺殿、同年、崇相

久於若宮八幡宮、慶長十三年(戊申カ) 号靈八幡宮、明暦元

年乙未十月、昇進兼喜明神、天和二年壬戌八月、進尊

兼喜大明神、是則請神道長上吉田右兵衛督卜部兼連而

進神位者也、

一天ヶ峯梅北村西成寺之上此所應安六年 氏久公志布志より發し

都之城北郷氏援軍之時御陣場なり、二月廿八日、去此

所平長谷ニ陣替と云々、西成寺より東南之方十町余も

可有之、御陣場ハ今茶器ヶ陣と云(術カ)、嶺上廿疊敷計、

北方之村

一安永城 号鶴翼城、大手口南、搦手口西に有、南面、

北川流、西北岸高し、北に野頸口有、伊集院一乱之節、

白石永仙度々此口より兵を出す、

一天正八年之頃都城内諸地頭左に記ス、

都之城

志和池

小秋丹後守

北郷藏人久慶

安永

梶山

北郷雅楽介

北郷三河守

都之城

野々美谷

北郷彦左衛門

北郷出羽守

梅北

志和池刑部少輔忠繩

山田

北郷右兵衛尉

一慶長四年之頃右同、

安永村

野々美谷城主

伊集院五兵衛

有屋田大炊左衛門

金石城主

安永城主

白石永仙

伊集院如松籠城之節本丸之城主

野々美谷城主

金石城主

古垣與兵衛忠興有屋田死後守 中山平太夫

一旧記に云、大永四年甲申五月三日、三俣野々美谷城受取なりと有、

一慶長五年三月十四日、伊集院源次郎忠真都之城落城にて 龍伯公當城ニ御打入、同十五日、唱太平なり、役者岩切三河入道なり、同廿日、富隈に御帰陣なり、

忠恒公ハ同廿二日鹿兒島江御帰城なり、

一球磨陣 安永北方村之内在関所之内ニ、南北大河流る、

一堀之内 南之郷之内、 忠久公御下國之後御居住之所

と見得たり、忠久公傳、文治二年之頃、三ヶ國(ママ)候歟、中略ス、三ヶ國ハ島津御庄南郷之内ほりに御所候、居住(ママ)別書ありとあり、

(久豊)

一梅北 豊久公四男出羽守有久之祖、庄内之内梅北七十

五町、其外諸所領地拾ふて、合百九丁八段領知するなり、

いつまで領したる歟、二世出羽守忠徳と云、三世出羽守忠明か時、賜大口城下三百五十一丁而守此地、後戦死と云々、

一関所 梶山郷 至日州飢肥領邊路なり、

一切寄セ 在番鎮梶山村なり、梶山郷通路往還之要所なり、北郷家臣警固之、

一福岡右同 細目右同 野頸右同 此三ヶ至日州飢肥領

邊路在番鎮、

一石原 〔大峯 川内〕 内山 正應寺口 中野 杵木水

流 前村 諏訪口 留木野 牧野 高野 秋丸 〔坂〕 緞屋

温川 〔坂〕 老持 大野 正矢谷 平山

此諸所邊路番有、

イニ外ニ梶山浦 福留 森之木 岡間など云邊路あり、

高拾八石 此高當分損地多く九石余有、

一德樹山 宝藏寺 或ハ此寺ハ、 山久院 臨濟大慈寺末寺、イニ、藤專、本尊阿弥陀陀之一なり 開山宗峯道 和尙

住持玄珠弟子、國分正興寺三世、貞治六年七月四日、イニ正興寺勸請開山とあり

北郷氏始祖資忠夫婦牌塔立

月窓道明居士 資忠 法名

柏庭妙意大姉 資忠 室 共に九月廿日を忌日とす、

當寺ハ古昔古江之内 安永 にありて寶藏寺と云、資忠夫婦之

石塔も此寺にありしを引移せしなり、今ニ右寶藏寺旧

跡にも石塔を立て 〔マ〕 しをあれたり、本より山久院と云

寺もありしを、何の時代欽宝藏寺・山久院合て一寺と

せられしや、本山久院之寺、今寺之東一町計にあり

島津 樺山 早水 寺柱

一樺山始祖安藝守資久、莊内之島津 今郡元と云、都 樺山 岡勝

之内・早水・寺柱 両所都之諸所領知而居住于樺山、以故 乃樺山者なりと云、

山田之部

一文明六年甲午八月之ころ、御内之方々、中略、庄内山田

に肝付大炊之助、中略、各一城つ、持たるとあ、〔り脱カ〕 肝付兼忠

三番目之弟を大炊助兼恒と云ふ、此人なるへし、

一諏方神社 野々美谷城内ニ在、棟札

上棟奉造立日向國 島津御庄北郷野々美谷諏訪御宝殿

一字、中略、大旦那安藝守長久、文龜二壬戌七月廿九

日云々——あり、

外ニ永祿以来之棟札あまたあり、略ス、

一選立寺 同所城下にあり、開山德叟和尚 永祿頃 〔マ〕

本尊阿弥陀

都之城裏原合戦

樺山・北郷両家を居住日州庄内、就中北郷七郎左衛門

資忠 〔マ〕 是文和四年十二月十二日賜日州北郷領地して

其地而築都之城居住者有年、爰に相良某領於肥後國八

代・葦北・球摩誇武威、与伊東氏合心、守護之侵領士、

當此時、薩隅日三州中之御家人等逆(マ、マ) 六拾三人

屬渠旗下、肥後三郡之軍衆と共逼領土、既至真幸・北郷・野々美谷為相良氏領地、以本原為本營、其大將者新野某なり、三州中之(マ、マ) 谷山・南方・市來・洪谷・

菱刈・牛屎・真幸・肝付・祢寝・福島・飢肥・伊東氏・土持氏等なり、自旧冬求要害之地結陣構都之城に逼る、北郷讚岐守義久・樺山美濃守音久以下銳勇在于城中、為防禦堅固なり、為救(マ、マ) 其急難、氏久公自將志布志より發向し、末吉南郷(マ、マ) 初来て守之、天ヶ峯(マ、マ) 着陣し

屬守護將者、加治木氏・肝付氏・二男財部氏耳、應

安六年正月頃(マ、マ) 神(マ、マ) 擬評議、定合戰以三月朔日豫一戰

同吉日、伊集院・伊作・鹿兒島・大隅・下大隅・大姉良等士卒を招て雖有此急難、師久公父子者、出水・

高尾野・野田・阿久根四ヶ所、東郷・祁答院・入來院・高城四ヶ所之敵(マ、マ) 被隔、不得出加勢、於是 氏久公又

三郎元久公謂曰、速可帰志布志、元久公曰、縦ひ雖有他所可馳走、臨合戰之期帰私宅全一身、其惡名を

如何、氏久公曰、元久言所を勇士衆卒之思処也、為大將慮ハ不然、亡万卒成一入、全其身遂本意事、是其

器量、輒然不悅曰、我与汝其思慮天地懸隔也、更無仰、暫有、元久公不得止事應諸帰志布志、氏久公父子

之深情智勇、候以旗下老輩勇士一人として無不落涙、就中本田信濃守重親後なる故吳他人、弟二郎氏親(マ、マ) 謂

曰、今度 必可遂戰死、汝等全身仰 元久公無二可抽

忠節、氏親其年雖為十一歳、不違命應諾、同年二月廿八日、去天ヶ峯陣于末吉平長谷、(今都之城之内) 同三月朔日、

財部之騎歩相加増勢、雖然都合老(マ、マ) 千不足、纔八百有余なり、月一揆大將者新納越後守實久、杵一揆大將者

本田信濃守重親、又一揆と称し二百騎計徒 氏久公之馬廻、是又両揆之内若有難儀横入之謀なり、去程(マ、マ) 二、

旗之役人北原(マ、マ) 梶原(マ、マ) 彦七郎進出曰、今日之旗如何云、重親答曰、專可駈通敵之後、北原應諾、旗を馬上(マ、マ) 二差上

謂軍衆曰、今日各守此旗、可被進平波、(マ、マ) 駈渡り、北郷讚岐守義久於城中云へる事有、(マ、マ) 日者 役相圖其

時也、為救其危急、太守之愛情諸軍之勞苦不可勝云、先一戰者我役と言、引卒小甲兵七十余人突入于大敵中、

雖然不利、義久蒙疵数ヶ所、舍弟弥次郎基忠・七郎忠宣(マ、マ) 甲戰死ス、爰に平田新左衛門尉家(マ、マ) ・工藤藏人者、

折於庭上之櫻枝挾己腰、太刀(マ)移刻、欲退入于城中、一同列之勇士等共謂藏人曰、汝等梶原彈正か花軍之真似する欵とて、且ハ狂言し、且ツハ戲笑す、藏人か曰、汝等不知我、何を可劣彈正、相共ニ笑て不止、亦其後致合戦尽粉骨越于人、氏久公ハ黒糸威之鎧を着、同毛冑有鍬形、着帶三尺有余之太刀、黒栗毛之乘逸物、差上旗於馬前、相従式百計之騎歩、月杵両揆を左右に進、敵軍充滿蓑原并轡扣、(マ)氏久公不懼之、直進突入於大軍中、各打太刀散火花、不顧死挑戰、氏久公在爰、不可被隔于敵勢、下知(マ)通於大軍中、扣馬於本原、或人夫或馬取以下不得逃去、溺死于池水者多、城中勇士今朝合戦負浅手者、出城門加 氏久公之軍衆、携入手負於城中、雖為少大勢敵兵被駈立於小勢之味方、散乱右往左往、鋭勇之士被討取者多、翌日求於死體廣野、敵味方僧法師互雜乱原野、其後討取所之敵首 氏久公實檢あり、他州敵首ハ相良氏弟氏頼・伊東六郎左衛門・同池尻五郎・薩州一揆張本洪谷右馬等なり、此(マ)諸卒等者不違書記、

高頭三万二千百八十六石七斗四升二合三夕四才

一高千九百七十八石五斗一升四合七夕九才

莊内中郷内
河東村

一同二千三百二十二石八斗一升九合二夕七才

同
宮丸村

一同七百七十四石一▽斗七△升三合四夕四才

同(南郷村)
木之前村

一同九百八十九石五斗一升三夕一才

三俣院内
古ハ井藏村下長飯村

一同九百七十七石一斗八升六合四才

莊内(寺)
安久村

一同千二百十九石三斗五升七合八夕一才

三俣院内
古ハ原口村上長飯村

一同七百五十一石七斗六升三合五夕四才

同
古ハ後校村後久村

一同二百六十三石五斗八升八合一夕三才

同
早水村

一同百四十三石九斗二升八合一夕二才

同
寺株村

一同七百二十二石九斗六升六合四才

同 田邊村

一同九百三十三石九升八夕四才

同 前八安永村ノ内
西嶽村

〔[㊦]ナシ〕 一同四百四十三石九斗二升八合一夕二才

同 寺柱村

一同二千二十八石六斗九升五合二夕一才

同 右同
中霧島村

一同六百五十石九斗三合五夕四才

飯田郷ノ内
鷺巢村

山田村

一同二千二百六十三石五斗六升四合六夕八才

鷺巢八三俣、五十町飯田

右山田村、古ハ上中原村、高原郷ノ内梶原村、中郷
ノ内一ヶ村ニナル、

一同二千二百九十四石一斗一升三合一夕二才

五十町村

一同五百二十石五斗四合一夕七才

三俣院内
岩満村

莊内南郷内
梅北村

一同七百廿九石一斗九升三合三夕三才

中郷内
丸谷村

右八万治御支配ヨリ益貴村・寄田村ト成ル、享保御

支配ニ此二ヶ[㊦]ハ被召除、梅北村ニ立、

一同七百七十四石六升五合九夕一才

同 野之美谷村

一同千五百廿七石二斗八升四合三夕八才

北郷内
横市村

一同八百八十四石五升二夕一才

莊内北郷内
金田村

一同千百三十九石七升一合二夕五才

中郷内
郡本村

一同千九百三十六石三斗五升五合八夕三才

右同中郷内
高木村

一二千七百六十石二斗三升九合二夕八才

庄内北郷内
前川内村

一同千五十二石七斗九升六合八夕八才

右同北郷内
石寺村

一千三百八十七石四斗四升五合六夕三才

一同千二百二十一石五斗六升五夕二才

右同中郷内
水流村

外増貴村・寄地村被召疊候、

用夫千二十人 一野町本町 新町 唐仁町 高木町

安久村

正應寺山王

日吉山王宮一字

右奉為 天長地久、御□□□、殊者當郷守護藤原朝臣

島津守遠江殿勝久并當別當權少僧都慈範、將又助成□

□息災延命、一之願念大願主三昧連日子孫繁昌也、

大工藤井盛滿 同小工隨幸・三昧隨善 鍛冶藤原貞次

當代官藤原五代右京助友春・藤原塚久義

應仁二戊子年二月廿九日

大願主源連日敬白

一再興棟

右奉為 天長地久、御圓滿(ママ)、殊者當郷守護藤原朝臣北

郷忠相并忠親御武運長久、子孫繁昌、別當有胤、將又

助成合力、息災延命、一之願念大願主座禪坊宥弁 當

代官田部氏土持兵部少輔興經身心堅固故也、

天文四年乙未十一月一日再興成就、大工藤原利家 小

工藤原利完 鍛冶正有 小工正次 宮司淨善白敬

同所文殊 文殊師利菩薩護國四王

右意趣者、願主源之親吉・沙弥長好・同正次 大旦那

藤原数久・同忠相 地頭田部之孝繩 源貞親

永正十六年己卯八月彼岸吉日 大工天民國勝 鍛冶源

秀定

同所

長谷觀音 日向州島津庄中郷内西方長谷寺本堂一字再

興棟簡之裡書、夫以斯堂者、正安元年之以前、歷湯多ネケマ、レ

星霜哉、依無詳、攸記錄知焉者稀矣、故久經年序、有

上漏下濕之嘆、隸之有僧顯睿為大願主、遍勸十方且家、

以修理畢矣、其棟銘之未有之云、正安元年己亥十月十

一日大勸進僧顯睿矣、尔来至永正十有七年庚辰④辰、取念倒摘

以稽視焉、則大凡二百二十二載也、然者依無大願力之

輩、中略 本願功德④王、淨觀法師高野山千手院住侶也、口断十

永正九年壬申九月廿一日始而修營焉、同十二年乙亥閏

三月十八日豎柱矣、同十七年庚辰正月十八日、遂取棟

簡以造畢矣、島津尾張守殿數久公・貴岡左金吾忠相公・

肥州大工蓮惠

同二郎殿・同姓久清公・忠隆公、寺社奉行和田宮内少

神社社棟 奉修造島津御庄惣鎮守

輔方、奉行川野方・吉村方・轟藤原秀貞・同新左衛門

天照大神神社宮御寶殿一字三間、

貞家

第一万壽三年丙寅 大願主平朝臣平大監末基

右古棟札雖有之、文字依不分明、為後代棟札表似一字

第二仁安二年丁亥大願主散位伴朝臣兼景

も不落板改書写之者也、

第三弘安四年辛巳大願主執行左衛門尉伴兼世

延宝三年乙卯林鐘廿一日 正應寺現住法印重興

第四應永八年辛巳大願主島津朝臣前陸奥守元久并同

一再興佛宇 永安置十一尊容奉法梁、中略、永正十七曆

讚岐守入道沙弥道且

龍集庚辰正月十八日 大且越島津忠相公再興功德 大

第五文明十五年癸卯大願主島津陸奥守武久 願主予

願主淨觀聖住山不磷僧〔乘法〕印

部當大藏藤井定家 大工守滿 音同守次 遷宮

一安久山王 寶宮一字

二月九日

右意趣、中略ス、藤原朝臣忠相并忠親息災延命、中略ス、

第六永正十三年丙子大願主島津朝臣近江守忠武 願

當代官興綱除災与樂、末略

主予部當藤井貞次 本願源晟沙門 遷宮四月十

天文六年丁酉九月十八日 大工利定

四日

一西明寺鐘銘

梅北貴船宮 奉重造 貴船大明神寶殿一字

謹奉捨入 日本島津庄日州北郷大同山西明禪寺常住、

永正十五年戊寅十一月〔月〕如意宝珠日 大且那藤原丹

右志趣者、為天長地久、御願圓滿、文殊大士為道且頓

治忠武并 久友 大願主貴禪寺住持比丘源秀 助縁施

證佛果菩提、次願主住持比丘祐奕、心中所願皆令満足、

主平盛豊

應永念三年丙申九月吉日

稻荷 上棟欽奉建立 稻荷大明神寶殿一字、

右旨趣者、一天清平、四海安全、國家〔材潤〕〔①村里專祈〕万民豊稔故也、大旦那藤原氏数久、四海無一〔二字〕〔①カク〕八節有大来之慶、

永正十又六年己卯十二月十六日 鍛冶梁瀬 (マ、マ) 小

工十人 大工榎屋加賀守 大宮司中西彦兵衛

荒武権現棟札 當社大権現者、慈愍勝諸神、利益西後衆生、可謂朝中無双之灵神也、認其本地則 恭以 六観世音也、中略ス、施主藤原氏之女、〔鳥津征久女、讚州忠能之室なり〕

慶安二白龍集己丑二月二十五冀書旃観寺中當山座主

法印権大僧都忠益敬白

ウラニ奉加人数之名あり、略ス、

稲荷 〔イツ地畝可糺〕 大旦那藤原朝臣忠能公并當旦那源朝臣重①繩

元和四年戊午三月十日 本願主佐向五郎〔白〕 大工小川〔三〕

地右兵衛重則・児玉圓覺坊・池田半兵衛・大光坊

観世音 謹奉刻彫 観世音菩薩御寶殿壇場

右之大旦那北郷〔後廬〕 藤原朝臣島津左金吾尉時久并讚岐

守忠虎——當地頭津曲備後守伴兼廣并狩野介兼親

坊主當寺二代沙弥阿弥陀佛

天正十四丙戌歲南呂彼岸主 東一坊敬白 大工〔漢〕阿弥陀佛 〔三〕

ウラニ合力人数之名あり、略ス、

合奉再興板敷観世音菩薩堂一字 大旦那藤原朝臣忠能之當地頭津曲兼業、殊に當寺四代但阿弥陀佛、

ウラニ元和六年庚申二月吉日 助成人數大工竹養齋 小

工日高膳〔右〕左衛門・海老原源左衛門 國分與左衛門 今

井五郎右衛門〔左〕

奉修造 観日立菩薩御寶殿一字——大旦那島津讚岐

守藤原朝臣忠能公并同出雲守——當地頭津曲狩野介伴

氏兼所 施主沙門随柳 當主四代但阿弥陀佛敬白〔寺〕

寛永六龍集己巳〔三〕十二月吉祥日

ウラニ合力人数アリ、略ス、

一天長寺 華鯨 元禄十五年鑄銘あり、略、

一都之城 六時鐘銘 享保七・元文四等之銘略ス、天明

乙巳新鐘銘

本藩公族北郷氏之私邑曰都城郷、々置銅鐘、以紀昼夜、其来舊矣、然不詳其始於何年、獨其改鑄元文庚申歲、

則有可考者云、今茲天明乙巳之春、今主 筑後君以舊

鐘之豐拆也、乃遣其臣於 府、倩鍛工黒木氏、改鑄銅鐘一枚、越三月甲寅新鐘成、將致諸邑以易其舊、又使其臣求銘於予、於是略叙其事、而繫以銘、々曰、

於赫公族、世食都城、地直疆場、政尚嚴明、以警衆、^{①何}
維時華鯨、約法施令、爰作之程、矧茲新器、龍質虎形、厚薄合度、厥製孔精、式改民聽、寔曰善鳴、永々勿替、庶振洪聲、

本府知字事山本正誼撰

附録

黒木氏名實興、自称仁右衛門、家世傳放火炮及造火炮、非特為鳧氏云、

一須久束社 宝曆十四年夏再興棟札有、幼君島津鍊熊公とあり、

一安久天神社 宝永六再興、

一同所白山権現 万治三再興、

一同所束野大明神 寛文三年再興、

一同所外山権現 寛永十九年奉造営——とあり、

一同所龍峯寺 享保辛丑歳久龍代再興、

大殿雲堂之記、現住即湛記と見得たり、

右三葉、都城より永禄十年書出したるに洩たるを拾ひ一冊としたるを借抄写す、于時文政辛巳七月十四日、

一梅北神社柱社棟札 奉修造島津御庄惣鎮守神社宮御寶殿一字三間

右意趣者、奉為金輪聖主天長地久、別而者檀越藤原朝臣忠重・同朝臣忠勝并朝臣久如宦禄増進、武運長久、領内泰平、万民豊楽、殊者社頭安全、諸人快樂之故矣、將亦當大宮司伴朝臣兼秋并勸進沙門権律師頼舜・同隆行、無二発願力、駟有縁^{①勸}、無縁、願念忽成就、抑當社妙見者、日本二柱月神伊勢大神宮日神此両天為無双尊神、依是日州南郷奉崇敬者也而已、仍諸願成就如件、^{①神}^{①尤}
本願沙門敬白

天文四年乙未卯月廿九日 小工藤原正續 大工藤原

範^①續^② 裏^③ 奉修造島津^④ 御庄^⑤ 惣鎮守 天照太大神

柱^⑥ 御寶殿 一字三間代^⑦ 造営之事

第一万壽三年丙寅大願主平朝臣平大監末基

第二仁安二年丁亥大願主散位伴朝臣兼景

第三弘安四年辛巳大願主執行左衛門伴兼世

第四應永八年辛巳大願主島津朝臣前陸奥守元久并讚岐

入道沙弥道旦

第五文明十五年癸卯大願主島津陸奥守武久

第六永正十三年丙子大願主島津近江守忠武

第七天文四年乙未大願主新納忠重遷宮卯月廿九日

合奉再^⑧造立南膽部州大日本國日州島津御庄南郷益貫村

神柱兩所妙見宮一字、略、文大英檀越藤原朝臣^⑨時久△・

同忠虎

天正十四年丙戌八月初三日 當城地頭伴氏兼廣 惣

大工前田右馬尉 小工・脇大工略ス、座主權律師惠

遍 大宮司伴氏宣兼 遷宮之導師西生寺別當權大僧

都法印勝政

再興勸進疏^略ス、益貫村有古廂、扁內宮外宮一字金輪尊

星王垂高跡於茲郷、昔平朝臣平大監末基者、住居於此

地矣、傳聞其志誇神明之至誠、以慈^⑩修身、可謂一代之

善士也、万壽三年丙寅歲、參詣伊勢大神宮、謂巫祝曰、

兩分彼垂跡請安置於我國、巫祝許之、終拜受頂戴婦去、

創造大廂、巧架高殿、中略、世人不謂乎、日本二柱是其

一社也、以故号神柱妙見大菩薩、其實體天照大神也、

拳國仰尊信者惟夥矣、即奉稱御之宗社、中略、自最初

建立以降已五百有餘年、風霜所侵柱根摧朽、雨露所墜

梁棟傾斜、迨敗壞凡五六ヶ度也、永正十三年丙子歲、

前近江守新納忠武重肇建之基而經之宮之、庶民之役匠

人成功不日而落成矣、中略、永正辛卯之冬、干戈蜂起於

鼎國、而不安社稷日淹于茲矣、同癸巳二月十五日、寇

讎陷于此境、乱將雲集、步卒霞遮、八人放出、忽成焦

土、中略、尔来矛戰未収、^⑪徒移涼燠而已、戰塵路暗、兵

車岐喧、依之借沙門勸進之力、漸欲興起此宮、無縮素、

無尊卑、不擇多寡、分與半文錢善、因之慈化展轉之功

德不可思議稱量、其詞曰、曩構數十間瑞籬、華麗盡

美、旧築第幾重紺殿、英靈加威、簠簋徹、無歌雍、鬱

鬯^⑫灌不同禘郊、社能備上下之礼、昭穆元有左右之倫、

今也此塔除秋盡黃葉埋霜、席前日晚碧草偃雨、若無鷲

眼展轉、爭成鴛瓦經營、

大永六年丙戌秋九月廿有四日

勸進沙門

安久鶴岡八幡棟札 棟上奉造立八幡大菩薩靈社一字、

左右佛語、略夫以日州島津庄者、我高祖豊後守忠久於薩隅

日三州權輿之地也、然則文明乙巳夏、与薩广守國久赴

飢肥之戰場日依難起、竊鎌倉雀岡八幡宮勸請之、願主

前左衛門尉▽^①藤原△數久・讚岐守義久・修理亮忠兼・

薩广守國久也、亦爰奉再興、大且越藤原忠相、別者大

且越忠親・同忠豊朝臣・久通朝臣弓前名加、國土安全、

万民快樂故也、依意趣如件、

司役聖應寺別當坊宥雅

天文二十三年甲寅^① 三月九日 本願主宝藏坊權大僧都

重圓敬白 當代官土持撰津介田部頼綱朝臣 大宮

司岩切兵庫允草部綱滿朝臣 二人大工藤原利定 小

工各藤原氏房 鍛冶源秀利朝臣

ウラニ、藤原久朝 岩切御教大貳公 宝藏坊之内良賢教

殿 治部郷公 土持撰津介田部頼綱 小杵右近 藤

原茂堯 同義高 山田治部少輔 大河原備後 外十

七人略、

安永諏方社 中略、故當神社者、北郷氏先祖之勸請、當

境旺化之靈席也、——略、

享祿三年庚寅十一月二十三日^① 北郷主君藤原朝臣島津

忠相并忠親・北郷延久・北郷久隆并久紹并忠茂 本願

主勸進法師^② 与州道前香園寺住持重圓敬白 大工物部

氏迫田丹波守重綱 鍛冶清兵衛尉重門

ウラニ、勸進之助成、藤原北郷二郎四郎殿・同北郷千代

松殿 喜庵大方殿 大河原備後守 蒲生式部殿 財部

藏人平盛住 山内佐土助教富 小杵河内守頼宗 小杵

右近尉 津曲四郎左衛門 龜沢将監殿 同雅樂介 外

數十人略、

山田華舞權現 上棟奉修造大山田六所權現御寶殿一字

右志趣者、奉為金輪聖皇天長地久、御願圓滿、殊者當

所安穩、人民安樂、庄内靜謐、五穀成熟、別大願主子

孫繁昌、息災延命、所願成就圓滿、所奉造管之精誠也、

仍注進如件、

嘉慶三年己巳二月二十五日 大願主大和守藤原華久^①

敬白 引頭草部國長^② 大工務丞草部國光^③ 小工草部

光吉 藤原末國 藤原國家

同社棟 奉再興華舞大権現之御祠一字 中略、藤原朝臣
数久公并同朝臣忠相公

永正十三年龍集丙子霜月初八日 大工迫田重綱 小
工略ス、

山田霧島荒嶽権現棟札 奉新造立霧島荒武①嶽三所権現御

宝殿一字 大旦那藤原朝臣時久并同朝臣相久 願主南

光坊権大僧都朝叶 當所代官藤原氏久意 當所奉行源

朝臣頼武 鍛冶源氏頼栄 番匠藤原氏秀次

元龜二年辛未三陽吉日 小旦那清水主馬允 森淡路

守 同大①藤左工門

山田荒神棟 天文廿二癸丑歲閏正月廿三日奉迁宮、

大旦那藤原朝臣忠相并同忠親・同忠豊等各御武運長久

堅固、別者當城住人体忠俊・役人源頼武等息災延命、

—大願主東蔵坊①有雄雄正— 正祝紀伊助 大①上石川新左衛門草部國光

小工略ス、

同社棟札 大旦那藤原氏数久公武運長久—

永正十六年己卯四月十六日 別而大願主大野出雲守

大工藤原正行 小工草部光吉

弓場田口湯田 八幡社棟札 奉勸請湯田八幡宮

慶長六年辛丑九月吉日 大勸進藤原朝臣忠能 大旦那

那源重頼

弓場田森①天子棟 奉再興森天子之社 大旦那藤原朝臣

北郷之主君忠相公

大永七年丁亥八月廿九日

ウラニ、本棟奉造立森天子一字之事、信心大施主源道

法

右意趣者、为天長地久御願圓滿也、心中所願皆令滿

足也、次大工九郎兵衛信①尉 次應永三十九年二月十七

日敬白

同所池之大王 奉①造立△池之大王御宝殿 大旦那

藤原朝臣時久公并忠虎公・忠堯 大宮司山下四郎兵衛

尉、大工以下略ス、

天正十八年十二月廿一日庚寅五月奉造立

來住口天神 奉建^{④立}天満宮神社一字

右御願意、為信心之大旦那藤原氏千代松丸 午息災延

命——

天文四年霜月廿五日

早水 謹奉再^{④興}日州島津庄早水三所大明神御宝殿一字

大旦那島津讚岐守右守藤原忠相并左金吾尉忠親

天文十二年癸卯十一月十二日 代官土持主稅助綱一

本願主重圓權律師 大工等略、奉加人数 北郷左

馬頭忠孝 同延久 以下略ス、

弓場田口 須久塚 上棟謹奉修造大日本國日州島津御

庄南郷都之城宗廣須久塚大明神宝殿一字

右者、大旦那北郷主君藤原朝臣島津忠相并貫息忠親武

功遠大之、^(マ、)

大永六稔丙戌歲菊月十五日 座主信心大法師実尊

大宮司伴兼豊 鍛冶・大工略ス、大願主与州住侶重

圓

ウラニ、大永六年丙戌三月廿六日、位^{④依}香火災神像とも

燒却了矣、^{④然間}于粵与州住侶重圓沙門、同七月廿二

日、念再興之、修造御宝殿・舞殿・長廳共至于九月

十五日乙未造畢遷宮者也、

弓場田今霧島 今棟裏ニ、古棟云、于時天文五年丙申

九月廿六日、^{④意}吳趣日、日向國南郷内須久塚相清淨^{④伊}

地、謹奉勸請霧島六所大權現 大旦那島津左金吾藤原

朝臣忠相公 大願主島津二郎藤原朝臣忠親公 上之坊

海遍法沙^{④師} 廷氏九沢書之、以下略ス、又札ニ云、

天正二十年壬辰十一月五日 大旦那藤原^④朝臣時久公

△^④遷宮導師△法印有海常樂寺開山海恵

横市 奉再興下財部之内雨下天神社御宝殿一字

大旦那北郷主君藤原忠相公・嫡子忠親 當官人小杵河

内守源頼宗 大宮司蒲生半左衛門尉藤原武次

天文元年壬辰 蒲生對馬守武永 天正四年丙子十一

月廿五日 権大僧正宥睿敬白^{④部}

安永 千施羅寺権現御宝殿一字、去冬仲冬之比、罹火^{④庇}

殃焦土となるなり、因茲郡主藤原忠公奉再興、

慶長十三年戊申十一月吉日、法印權僧都真海 座主

善財坊祐忠 地頭北郷善兵衛時久采〔右衛門〕小

杵丹波入道源重頼 土持右馬助田部重高 大工略ス、

賄奉行知覧三河守久實 河合勝右衛門時勝主 内藤

儀 外略ス、

同寺 觀音堂、中略、日州下財部郷柁陀羅寺之内常樂寺

者、為霧島大権現之本地、有大悲尊像、經累代之雪霜、

而御堂將暨廢壞矣、粵与州之住侶六十六部〔之〕重圓

雖欲造立焉、更無一物之蓄、于然小杵河内守頼重以一

万二千字札方与市、於茲造営之、中略、大旦那藤原島

津尾張守数久公・左金吾忠相公〔之〕忠臣山内豊前守義

清

永正十有六稔龍集己卯 呂廿三日

ウラニ、北郷右衛門兵衛尉 北郷民部少輔 北郷三郎

次郎 北郷六郎〔兵衛〕 宮内少輔 財部蔵人

山之内豊前守 山之内新左衛門 山之内三郎左衛門

尉 山之内丹後守 山之内孫七 山之内大膳 山之

内与次郎 山之内治部〔少輔〕 山之内次〔左〕衛門

右同觀音堂 棟常樂寺棟上之大旦那藤原朝臣時久并藤

原朝臣忠虎 當地頭久観 大願主權少僧都政運 導師

權大僧都重清

天文十八年庚寅四月十七日 大工略ス、

安永中霧島 奉再興霧島大権現靈祠一字 大旦那島津

尾張守藤原朝臣数久公 文龜二年龍集壬戌玄律小春好

信 代官藤原氏主篤 大〔工〕草壁氏國光 大工略

ス、

同社棟札 奉再興日州北郷内安原大権現本堂一字 大

旦那北郷主君藤原朝臣忠相并左金吾藤原忠親 本願主

沙門權僧都律師重圓

天文九年庚子十二月吉祥日 北郷信濃守久紹并北郷

讚岐守久基 財部筑前守平盛住 旦那大河平兼宗以

下略ス、

安永妙見棟 本師釈迦牟尼如来 大旦那再興主君藤原

〔時久朝臣〕并相久 當城檀主忠時 勸進山伏与州住人

覺藏坊 座主坊明星院重成

元龜四年十一月十三日

ウラニ、安永村水上妙見三所大菩薩御寶殿棟上一字

財部太郎〔九郎〕^{⑨丸} 渡部出雲守以下名略ス、

安永八幡^{中務島之末社} 大旦那藤原氏耆英尾張守数久公 當代

官藤原氏篤重

明應九年庚申霜月七日

同所山神 奉造立——

天文十四年己巳三月吉日 大旦那島津藤原氏視刃千^{マヤ}

代丸 大工以略ス、^{下脱力}

郡本稻荷 上棟 謹奉再造日州島津御庄郡本 稻荷九^{マヤ}

社大明神御寶殿一字也、伏而以當社者、北郷乃祖藤原

朝臣 島津忠久自京師輔佐来以安置于此郡、号社稷之神、尔来露往雨来、物換星移、棟撓瓦破、于爰北郷後

胤藤原朝臣島津讚州太守忠相并左金吾尉忠親并次郎忠

豊、欲企修造之願力、以夜繼日經之營之、伐々^{⑩木}丁々声

響雲、山神合力、雨杵風椿榎于社頭、何況人民不崇敬

乎、丹之霜相加紅、罌之寒梅讓白、天神地祇処感也、

故不日落成哉卜令月、^{⑩初}祢二日丁願滿成就之嘉辰、八正

帚掃三毒之垢、以迂宮畢功矣、^{⑩大}天望清淨之御宝殿、

則黃金為瓦、白銀為壁、水渦蜂房除火盜之災、月窟鶯

瓦遮風雨之魔、棟梁椽柱巍然歷億兆之星霜者也、 仰

願、武運康健者如合魏吳、^{マヤ}蜀三ヶ国、子孫繁茂者似保

文武成八百年、壽命綿延、君臣快樂、^{⑩初}如之何平則戰場

之草緑、国富則大倉之粟紅、皇風与堯風永扇、神門与

且門弥昌、至祝至禱、常安常樂、三宝證明、諸天洞鑑、

于時天文十四年龍集乙巳十一月二日 大旦那北郷主君

藤原朝臣島津讚岐守太守忠相并左金吾尉忠親、次郎忠豊^{⑩并}

和田越中守匡盈并 宮内少輔匡隆 本願主、^{マヤ}權律師

宝藏坊重圓 座主少納言 大工・カチ略ス、

ウラニ、奉加 北郷雀千代丸 北郷左馬助忠孝 北郷

右衛門大夫久厦 北郷鎌千代丸 北郷鍋夜又丸 北

郷龜千代丸 北郷圖書^{⑩助} 北郷六郎三郎 北虎千代丸^{郷脱力}

北郷源七 北郷歳千代丸 北郷左近将監 北郷八郎

〔兵衛〕^{⑩ナシ} 北郷又千代丸 北郷宮内少輔 樺山民部少

輔 和田龜安丸 和田助十郎 和田助次郎 落合刑
部少輔 小松右近丞④杉 土持民部少輔 山之内美作守
山之内佐渡守 財部筑前守 財部藏人介 財部犬五
郎丸 財部伴五郎 小杵掃部助 山之内勘解由 蒲
生筑後守以下六十人
計姓名略ス、

野々三谷 上棟奉造立日向國島津御庄北郷野々三谷諫
方御宝殿一字之事

右意趣者、為天長地久御願満圓、殊者 大旦那安藝守
長久子孫繁昌、息災延命、帶所願皆令満足、

文龜二二年壬戌七月廿九日 大工児玉兵庫助満宣(行カ)

児玉彦三郎守定 引童彦七郎安定

同社棟 奉造立諫方大明神拜殿一字

右者、大旦那藤原氏時久并忠虎

天正十九年辛卯二月廿五日 大勸進者藤原利意 大

工略、

ウラニ、奉加人衆北郷兵部少輔殿久栄 石坂出羽守殿

久明 小杵下総守殿頼久以下十六
人略ス、

梶山 上棟奉造立諫方両宮御宝殿一字 大旦那北郷主
君讚岐守藤原朝臣忠相卿・北郷藤原朝臣左金吾忠親卿・
忠豊公・久通・藤原久厦 當地頭久薰 當所役人蒲生
式部丞藤原經重

天文廿一年壬子十二月十一日 大願主大宮司谷口但
馬助藤原朝臣重家 大工・鍛冶略ス、

同所 上棟造立新磯六所大権現宮一字 御願主藤原朝

臣尹祐・藤原虎乘丸并女大施主息災延命、當代官祐賢
并女

永正十七年庚辰四月十三日 願主山城國之住侶六十

六部聖圓識房 大宮司藤原朝臣則宗

別ニ横板ニ

大日本國日向國島津御庄加持山村新磯六所大権現奉造

立社頭一字 惣旦那事長倉孫九郎藤原信種 當代④官藤原

氏祐賢(花押) 藤原氏肥前守 藤原氏新左衛門 同

藤(原村)④兵衛尉 福永因幡守 後藤新兵衛尉 後藤三郎右衛

門尉 安藤伊賀守 安藤犬法師丸 安藤新左衛門尉

弓削中務④大夫 野村主税助 以下數十人略ス、末ニ相

良永兼入道 長倉乙乘丸 勝善院権少僧都海弘（花
押）

ウラニ 児玉玄番允 以下十余人略ス、年月日前文ニ同し、

文
書
目
録

例言

- 一 本巻に収めた「日向地誌備考 追録一」「日向地誌備考 追録二」「日向地誌備考 追録三」「日向地誌備考 追録四」を、それぞれ掲載順に通し番号を付して収録した。
- 一 本目録は、記事・記録を除いて文書のみを記載した。
- 一 文書は、番号のほか、年月日、文書名を記載した。
- 一 文書の年月日については、原文書記載の年紀はそのままとし、補筆の年紀は「」で囲んだ。また疑義の示されているものは「」で囲んで区別した。
- 一 年紀を欠くものうち、推定しうるものは（）で示した。
- 一 月の異称は数字に改めたが、正月、朔日、晦日などはそのまま残した。
- 一 原則として『鹿児島県史料 旧記雑録』及び『同 旧記雑録拾遺』にならない文書名を付けた。
- 一 重複により本文を省略した文書には※印を付した。

番号 年 月 日 文書名

日向地誌備考 追録一

諸縣郡沿革

真幸郷

一 建武 元年 五月廿七日 日下部行房讓狀

二 貞和 二年 二月 七日 大江某・源某連署宛行狀

加久藤郷

飯野郷

小林郷

三 慶長十二年 閏四月廿四日 島津惟新弘願文

須木郷

高原郷

高崎郷

四 延宝 九年 九月 朔日 朝倉小名覺拔書

五 天正 七年 三月 吉日 村田経定外二名連署坪付

六 天正 八年 二月 吉日 本田親貞坪付抄

野尻郷

綾郷

高岡郷

倉岡郷

関ヶ原乱後稲津狼藉一件

関ヶ原御合戦後日州辺江稲津致狼藉候一件

稲津乱記

七 慶長 六年 二月 三日 島津忠長外三名連署加増目録

番号 年 月 日 文書名

日向地誌備考 追録二

稲擾録 穆佐郷

上三侯郷

下三侯郷

山之口郷

三侯院記(山之口・勝岡)

三侯院古雜記

一 建久 八年 六月 日向国建久岡田帳写抄

二 建武 三年 正月廿五日 少式貞経軍勢催促狀

三 建武 三年 三月廿八日 足利尊氏御教書

四 建武 三年 六月 重久篤兼軍忠狀

五 建武 三年 十一月廿一日 建部重種着到狀

六 建武 三年 十一月廿一日 島山直顕軍勢催促狀

七 建武 三年 十二月十四日 島山直顕軍勢催促狀

八 建武 三年 十二月十八日 宗像氏純着到狀

九 建武 四年 正月 十日 建部清種軍忠狀

一〇 建武 四年 二月廿二日 藤原兼政軍忠狀

一一 建武 四年 三月 十日 福王寺真重着到狀

一二 建武 四年 三月十五日 土持重綱一見狀

一三 建武 四年 四月廿三日 建部清道軍忠狀

一四 建武 四年 四月廿三日 建部清道軍忠狀

一五 建武 四年 四月廿九日 長谷場久純軍忠狀

一六 建武 五年 後七月 二日 島山直顕施行狀

一七	曆応二年	八月廿七日	建部清道軍忠状
一八	曆応二年	八月 卅日	建部清種軍忠状
一九	曆応二年	九月 五日	重久篤兼軍忠状
二〇	曆応四年	十二月 廿日	畠山直顯奉状
二一	明德四年	六月十一日	島津元久書状抄
二二	至徳元年	十二月 九日	足利將軍家御教書
二三	延文二年	八月廿七日	畠山直顯寄進状
二四	嘉慶二年	八月廿二日	島津元久安堵状
二五		十月廿九日	島津忠国書状
二六		十一月 十日	島津忠国書状
二七			島津立久覚書抄
二八		四月十八日	島津立久書状
二九	永享四年	七月十二日	榊山孝久書状
三〇	永享四年	七月十三日	榊山孝久書状
三一	永享八年	六月廿四日	伊集院熙久契状
三二	永享十三年	五月 十日	北郷知久契状抄
三三	嘉吉元年	九月十二日	和田正存契状
三四	嘉吉元年	九月十二日	高木殖家契状
三五		八月 三日	北郷知久書状
三六	嘉吉元年	十二月十二日	室町幕府御教書
三七	嘉吉元年	十二月十二日	室町幕府御教書
三八	嘉吉二年	十月廿五日	室町幕府御教書
三九	嘉慶二年		鹿屋忠兼覚書
四〇	嘉慶二年	八月廿二日	島津元久安堵状
四一	天文十三年	八月 廿日	北郷忠相施入状

山之口郷	三侯院記(山之口)			
	四二	寛永十一年	二月十九日	的野寺社屋敷竿次帳奥書
	三侯院記(高城)			
	四三	応永十六年	五月十五日	島津久豊願文
	四四	文正二年	六月十七日	島津立久寄進状
	四五	延徳四年	二月 十日	島津忠昌朱印状
	四六	天正十六年	五月 七日	島津義弘願文
	四七	天正十六年	五月十七日	島津義弘願文
	四八	天文廿一年	二月 吉日	北郷忠相寄進状写
	四九	天文十三年	八月 廿日	北郷忠相施入状
	※	御居城由来記(高城)		
日向地誌備考 追録三	日向国宮崎縣大小区町村表			
南諸縣郡	志布志郷			
一	建久二年	五月 九日	源頼朝御教書	
二	建久二年	十二月十一日	源頼朝下文	
三	建武三年	二月 日	重久篤兼軍忠状	
四	貞和四年	六月 日	島津貞久書下	
五	延文二年	十二月十三日	一色範親宛行状	
六	延文二年	五月 日	建部清増軍忠状	
七	正平十四年	八月 卅日	島津氏久安堵状	
大崎郷				
大崎郷	飯隈山書出			

日向地誌備考 追録四
都城郷

八	慶長 五年	十月 十日	島津惟新 <small>弘感</small> 狀	神社仏閣上梁文写
九	(元禄十五年)	五月十八日	東山天皇女房奉書	都城郷
一〇		九月十八日	柳原資廉・高野保春連署狀	島津の字出所考
一一	(元禄十五年)	五月十八日	近衛基熙書狀	一 安元 二年
一二	元禄十四年	九月十六日	修理権太夫兼仍奉書	二 元暦 二年
一三	(慶長十二年)	五月廿八日	島津家久書狀	三 文治 二年
一四	慶長十三年	七月廿七日	聖護院門跡令旨	四 建久 八年
一五	元和 四年	九月廿一日	聖護院門跡令旨	五 建久 八年
一六	元和 三年	八月十一日	聖護院門跡令旨	六 (建治) 二年
一七	元禄 二年	九月 五日	法印光有奉書	七 康安 元年
一八		九月十三日	聖護院坊官奉書	都城郷
一九	元和 五年	二月十五日	島津家久書下	莊内郷
二〇	(元和 三年)	十一月三日	町田久幸外三名連署狀	都城・末吉古雜記
二一		九月十七日	聖護院坊官奉書	八 貞和 三年
二二		十一月三日	町田久幸外三名連署狀	九 貞和 三年
二三	元亀 三年	二月 七日	石卷判官奉書	一〇 永享 七年
二四	天正 廿年	正月廿三日	全阿弥奉書	一一 天正 五年
二五	寛文 八年	十二月廿六日	江戸幕府修験定書	一二 建武 三年
二六	慶長 三年	二月十五日	島津義弘証狀	一三 延応 元年
大崎郷				一四 慶長十七年
松山郷				一五
地理志 (松山郷・志布志郷・大崎郷)				

鹿兒島県史料編さん関係者

史料編さん 東京大学
顧問 史料編纂所所長 保谷 徹

九州大学名誉教授 安藤 保
志学館大学教授 原口 泉
委員 三木 靖 日隈 正守
丹羽 謙治 佐藤 宏之
塩満 郁夫 尾口 義男
堂満 幸子

鹿兒島県歴史・美術センター黎明館

館長 酒匂 司
副館長 赤間 広嗣
調査史料室 栗林 文夫
学芸専門員 市村 哲二
資料調査 藤崎 光穂 春山 直人
編集員 橋口 正樹 山元 亜由美
原田 紗代子 (向原 雅子)

鹿 兒 島 県 史 料

旧記録録拾遺 地誌備考八

令和 3 年 3 月 12 日 発 行

非 売 品

編集 鹿兒島県歴史・美術センター黎明館

発行 鹿兒島県

印刷 株式会社 きょうせい

